

## アルマータから1サロス

—1968年ソ連日食と天文施設ツアーをかえりみる—

木村 精二

今年10月3日、グリーンランドとアイスランドの中間、北大西洋上で金環皆既食が見られます。最大の皆既食継続時間が0.1秒と聞けば、大変に価値のある観測ができそうですが、太陽の高度が5°でしかも海上ですから、観測行きは非現実的であり、話題とならずに過ぎてしましましょう。しかし読者の何人かにとっては、18年ほどまえのアマチュア活動史上特筆されるべき出来事を思い起すきっかけになるはずで、今回の日食から1サロス、つまり18年11日まえの日食、1968年9月22日の皆既食こそ、日本の天文愛好者が団体を組んで初めて外国へ観測旅行を試みたときの天文現象です。そのときの皆既食継続時間の最大は40秒でモスクワの東1700Kmの地点。皆既帯は北極海に面したノースランド付近に始まり、中央アジアから中国南部に達して日没になるという予報でした。

主催は地人書館、旅行取扱は日本交通公社虎の門営業所。発端は「1968年早春のある日、……編集室の一隅に、同社長・編集人・常連の執筆者が集まっていた」（団員が自費出版したメモ）ときたのです。「全国の天文アマチュアに呼びかけて、9月22日のソ連における皆既日食を日ざす観測隊を編成しようという案が出され」（同上）しました。「主催者は、皆既日食観測に深い経験をもち、しかもアマチュアの指導に理解のある秦茂氏に、観測責任者になっていただくことを懇請した。幸い関係者の理解あるとりはからいで同氏の同行が実現し、筆者もそのお手伝いすることとなった」（同上）のです。「観測地は、幾多の曲折を経た後で、中央アジアソ連邦カザフ共和国首都アルマータの北東100Km付近を予定し」（同氏）しました。皆既継続30秒、高度10°で、天文学的条件は決して良くはありませんが、シルクロードの幹線、天山北路のステップ・ルート途上に位置し、年間を通じて雨量が少ない半砂漠地帯、9月の日照率70%と予想されていました。

この団体旅行の目的は日食だけでなく、ソ連の主要天文施設を見学するというスケールの大きいものでした。アルマータ天文台・タシケント天文台・クリミヤ天文台・レニングラードのブルコポ天文台・モスクワのプラネタリウムと宇宙科学博物館……。あの広大なソ連国内の著名な都市を2週間かけて一巡し、新潟発9月18日、横浜着10月4日という17日間のジャンボ・ツアーに応募したプロ・セミプロ・アマチュアの数は20人を越えました。

8月30日、パスポートなどの旅行手続き、観測器材の準備もほとんど済んだときでした。地人書館社長ゴム印の押したタイプ打ち青焼きの手紙が速達で参加予定者あてに発送されました。その一部をここに披露いたしましょう。

“……御高承のように、ソ連・チェコ間の政治情勢が悪化し、その本計画に及ぼす影響に関し

ていちまつの不安をいだいておりましたところ、一昨日、ソ連邦インツォリスト（国営旅行社）より電報がはいり、観測地点アルマ・アタへの立入り不許可を通告して参りました。

よって当社といたしましても早速ソ連邦国営ノーボスチ通信社、モスクワ本社のアジア局長と国際電話にて連絡をとり、事情を問合わせましたが、ソ連邦政府すじ、インツォリストからの解答（原文のまま）は、何等観測地点立入り不許可の理由を示さず、ただ不可能の一句に終始する始末でございます……。

観測団役員の皆様には早速御参集願ひ協議いたしました結果、今回の皆既日食の観測は事実上不可能と判断し、観測団中止のやむなき事に決定いたしました……。

万一強行して、ソ連邦に渡る事が出来たと仮定いたしましても、ソ連領でいつ何時軍隊の移動が起るかも知れず、そのために観測地点に達する以前に途中で足どめをこうむる事態もおこりかねません。……”

上記の文面ではっきりしているとおり、皆既日食観測を目的としたツアーは催行されないこととなったのです。しかし前述したとおり、もうひとつの大きい目的、つまり天文台視察の方までダメになったわけではありません。上記の手紙はこの点について追伸という形で参加予定者の意志をたしかめたのです。

“……またとない機会だからせめてソ連の各天文台をはじめ、各地の宇宙科学研究施設の視察だけでもしてはどうかとの御意見をお持ちの方がございますので、かかる御希望の方が多い場合にはその方法を考慮いたしたいと存じます。……御賛成でございましたら大至急折返し御通知をお願い申し上げます。”

“皆既帯に入れないことは承知したけれど、それでも行く” — こう意志表示した人は十数人に達し、訪ソ団が成立したのです。しかし、呼びかけの経過、最初の目的が日食であったことから、十数人の心の中では皆既をすっかり断念し切れず、そのことは、ソ連へ持ち込んだ観測器機と観測準備が単なる部分食用ではなかったという事実で、証明されました。団員たちの心情と熱意にうたれた結果、最初は予定していなかった皆既帯立ち入りの現地交渉をアルマータにおいて、深沢・秦・木村たちが中心となって、不自由な外国語をあやつりながら、必死になって行なったのです。結果は、「市外北方へは一歩たりとも出ることはまかりならぬ」という日本出発前と同じ返答のくり返しでした。

× × ×

“現地で要請すれば皆既帯に入ることはできる”という楽観的な考えで出掛けたのではないかという批判、または“皆既食の観測は不能ということは承知しながら、ハッキリ参加者に伝えなかったのではないか”という非難など、当時はいうに及ばず、その後も繰返して聞かれました。いずれも曲解か情報不足にもとづく誤解であることが、おわかりいただけたでしょうか。地人書館の天文誌は、当時「天文と気象」でしたが、1968年12月号をソ連日食特大号として、33ページを訪ソ団関係の記事で埋めました。そのトップは深沢武雄編集長の「黒い太陽を

求めて」です。上記の拙文と合わせて熟読していただければ、幸いです。1968年訪ソ団のメンバーの間で、1サロスを迎えるのを機会に、その後の日食観測団が作ることが通例になっているような形の報告書を出そう、という相談が始まりました。今年秋に予定されている全国的な日食記念集会でご披露できれば、と思っています。